

〔論文概要書〕

(論文名) 『中世東大寺の組織と経営』

永村 眞

昭和初年以來、わが国の寺院社会史に関する研究は、数多くの成果を蓄積しており、その主流をなすものは、寺院制度史の研究、寺領荘園の支配・経営構造を考察する経済史的な研究、個別寺院の足跡をたどる寺誌的な研究であった。そして近年、政治・社会史的側面にわたる時代の発展のなかで、寺社勢力が果たした具体的な機能を説明するという視点からの、寺院社会史の研究も進められている。

このような寺院社会史の研究の流れのなかで、寺院社会を構成する多様な要素のなから、時代的な変遷とその画期が明確である経営・支配の組織が特に注目され、寺院のもつ組織構造の解明が中心的な課題とされてきた。たしかに寺院社会の枠組を形づくる寺務組織(経営組織)の研究は、寺院社会史を考える上で必須であるが、その組織の内部にあつて、寺院社会を實質的にささえた僧団(寺僧集団)の存在が等閑視されているきらいがある。つまり寺院社会の実体ともいえる僧団の組織と発展という問題が、従来ほとんど注目されることなく、寺院社会史が組織・制度という側面のみで考察されてきたわけである。

そこで以上のような研究動向にたいして、個別寺院における寺務組織と僧団という両面から、その存続の具体的な足取りをたどるなかで、寺院社会の存続にかかわる様々な要件について、その考察を試みることにした。

なお寺院社会と世俗社会とを、等質でとらえるか、全く存立

目次

序	第一章 中世東大寺の形成過程
	第一節 東大寺別当・政所の成立
	第二節 東大寺別当・政所の変容
	第三節 「院家」の創設と発展
	第四節 平安前期東大寺諸法会の勤修と二月堂修二会
	第五節 寺内僧団の形成と年預五師
	第二章 中世東大寺の再建活動
	第一節 東大寺大勅進職の機能と性格
	第二節 東大寺勅進所の創設と諸活動
	第三章 中世東大寺の諸階層と教学活動
	第一節 寺内諸階層の形成
	第二節 東大寺学侶層の寺内諸活動
	第三節 東大寺講衆集団の存立基盤
	第四章 東大寺油倉の成立とその経済諸活動
	第一節 燈油聖の活動と油倉の成立
	第二節 油倉の組織と諸活動
	第三節 油倉の金融機能と惣寺財政
結 論	中世東大寺院家の経済活動と財務構造

の原理を異にとらえるか、研究の大前提にかかわる基本的な姿勢は、研究史をたどる限りでも多様である。本論文では、寺院社会には組織の存続と行動にかかわる独自の原理があると考え、世俗社会とは一線を画した独自の原理と空間のもとで、寺僧集団の活動と経営組織の変遷があつたとの前提により、考察をすすめた。

そこで以下に、本論文の各章節の概要を掲げることにした。

本論文は、古代・中世における東大寺という一組織体について、寺院社会が存続するための様々な側面から、その具体的な経営史を跡付けようというものである。しかし寺院社会を対象とするとしても、考察にもちいる素材の性格や、考察する立場により、描かれる寺院社会が、全く異なった様相を示すことになるのは当然である。そこで東大寺の経営史を考察する上での、基本的な姿勢・立場というべきものを、まず最初に明確にしておく必要がある。そこで第一に、寺院社会を見る視点を寺内にすえ、寺内から見た組織体の行動をたどる、第二に、寺内で作成され伝来した寺院史料を主要な素材として、寺院社会に特有の行動原理を確認した上で、その原理にもとづき寺院社会の組織と行動を理解する、第三に、すでに述べたところであるが、寺院社会の基本的な構成要素を寺務組織と僧団と考え、両者相互のかかわりのなかで寺院社会の展開をたどる、第四に、寺院社会が存続する柱を、仏・法・僧の一体化により実現する仏教儀礼（法会）と考える、という四点にわたる視点・視覚を措定することにした。

会への規制強化という時代背景のなかで、寺職としての寺家別当（東大寺別当）が寺内に登場し、三綱所・造寺所を相次いで配下におさめた。そして貞観年中までに寺家別当を頂点に、三綱所・造寺所がその実務を分掌する経営体制が確立した。

なお東大寺の創建にかかわった良弁僧正を、寺家別当の初代とする説が、すでに平安院政期には寺内の常識となっていた。しかし前述のように、寺家別当が寺内に登場したのは平安前期のことであり、奈良時代には寺家別当は存在せぬ以上、良弁や空海などが、少なくとも寺職としての寺家別当に就任したとの説は認めがたいところである。

平安前期の寺家別当の登場により、従来は寺家を代表していた三綱所は、その立場を寺家別当に譲り、みずからは政所を称し、寺家経営の実務をになうことになった。また寺家別当と三綱とは、上下関係が法的に規定され、寺家別当の意思は政所により実現されることにより、寺家別当と政所とは一体視されるようになる。なお三綱を所司とする政所は上司、専当・勾当・知事を所司とする造寺所は下司と呼ばれ、おのおの上司別当・下司別当を首座において、寺家別当の交代にかかわらぬ組織を維持していた。また政所（上司）と造寺所（下司）は、個別に封戸を財源としてもち、相互に所司を交流させながら、寺家経営の機能を分掌したわけであるが、造寺所の所司の専従化と、上司別当の下司別当兼務により、しだいに政所（上司）が造寺

中世の東大寺が形づくられる平安時代を中心として、寺務組織の構成とその変遷（第一・二節）、合議制を基礎とする僧団の形成と寺家経営への関与（第五節）という問題を中心に、僧団を構成する寺僧の生活・修行の拠点である院家の展開（第三節）、僧団により支えられる仏教儀礼としての法会の編成（第四節）について考察した。

第一節 東大寺別当・政所の成立

本節では、創建期から平安中期の間、いかなる構成と名称をもつ組織が、寺家経営をになったかを、特に寺家別当と三綱との役割を軸にして考える。

創建期の東大寺では、官司である造寺司が造寺事業を、三綱・知事・目代から構成される三綱所が寺務組織として、寺僧・財務・資財の管理にわたる寺家経営を担当していた。延暦八年に造寺司が廃止された後、その機能を継承した寺内組織の造寺所と、寺家の経営組織である三綱所が、ならんで寺家の存続をささえていた。ところが延暦末年に、桓武政権による南都寺院社

所（下司）に優位を占めることになった。

さて寺家別当と三綱に主導された寺家経営は、寺僧集団（僧団）の支持を不可欠とした。とくに延喜式により、寺家別当・三綱が僧団の推挙により撰任されるとの原則が定められてからは、僧団は寺家別当の撰任にみずからの意思を表明し、一方重任を望む寺家別当は、僧団の意向を尊重し、その支持を求めたのである。そして平安中期には、寺家別当を頂点にもち三綱により構成される政所が、僧団との協調のもとに、経営組織として寺家経営にあたる事例が確認される。

第二節 東大寺別当・政所の変容

本節では、寺家別当と政所による寺務組織が、平安後期以降にいかなる組織的な変容をとげたか、またその変容の根源は奈辺にあったかについて考え、中世東大寺における寺務組織の形成過程をたどってみる。

平安中期までに確立した寺務組織は、寺内に止住する寺家別当が、三綱により構成される政所を指揮して、寺家経営を行うという体制をとるものであった。ところが平安後期になると、「真言宗」を本宗とし寺外に散住する寺家別当が、相次いで出現することになった。これは公家における密教修法の偏重を背

景に、「真言宗」分として公請をうけ公家の主催する修法に出仕し、勅賞にあずかり高い僧綱官位をうける東大寺僧が増加し、しかも寺僧に限らず寺家別当に撰任されるという現象がうまれたからである。寺家別当が寺内に止住せぬという現象は、寺内に教學活動の沈滞をもたらすとともに、公家が寺家別当を撰任する条件も、別当が果すべき機能を反映した「能治」と「常住」から、「僧綱」と「大師之門流」（「真言宗」）へと変化する事になった。

寺家別当の寺外散住という現実を、寺僧集団は決して容認したわけではなく、公家に常住僧の別当撰任を求める一方で、常住せぬ別当の代理として、権別当の補任を求めた。しかし寺僧集団の要望にもかかわらず、寺外散住の寺家別当は増加の一端をたどった。そこで寺僧集団は、かつて東大寺僧とされた弘法大師空海の法流に連なる、「真言宗」を本宗とする東寺・醍醐寺・仁和寺等の寺僧を、あえて「他寺」僧ではなく、「本寺」僧に准じる「末寺」・「別院」僧として、その別当就任を受け容れたのであった。

さて寺家別当の寺外散住は、寺務組織に大きな変化をもたらした。寺外にある寺家別当は、多くが高い僧綱官位にあることから、家政機関である坊政所をもち、おのずからこの坊政所が寺家別当の実務を負うことになる。また元来は三綱の執務機関の名称であった政所が、その上にたち決済機能をもつ寺家別当

と同一視されることにより、「政所」が本来の意味から寺家別当自身を指し示すようになったことは、すでに触れたところである。ところが別当自身をさす「政所」が寺内に存在せぬことから、別当と一体となって寺家経営を支えた三綱の執務所も、従来の政所ではなく公文所と呼ばれるようになった。この公文所が、寺外の別当坊政所と連係して、寺内側で寺家別当の機能を、実務的に支えることになる。つまり平安後期以降における寺家別当の寺外散住という現象は、寺家別当・政所による寺務組織を、寺外の別当坊政所と寺内の公文所による寺家経営の体制に移行させたわけである。また以上のような寺務組織の変遷に応じて、政所下文（別当下文）・別当御教書・公文所下文・別当坊政所下文など、多様な形式の文書が発給された。なお寺外に散住する別当の機能を負うために成立した別当坊政所は、平安院政期も末になると、寺内に常住する別当にも設けられ、以後、鎌倉時代を通じて、別当坊政所と公文所による寺家経営体制が維持されることになった。

創建期から平安院政期にいたる寺務組織の変容のなかで、寺家経営を実質的に支えたのが、三綱所・政所・公文所を構成した三綱（寺家所司）であったことは言うまでもない。とくに寺家別当の寺外散住により、寺内におかれた公文所の実質的な役割は拡大するとともに、おもに三綱が兼務する執行や諸目代の寺職が新設され、これら所司による寺務の分掌体制が整備され

た。さらに所司の機能が確立するとともに、その専門化がすすみ、血縁をたどり所司の寺職が世襲されるなかで、いわゆる所司院家といわれる薬師院・正法院等が生まれ、鎌倉時代以降、所司には特定の院家の寺僧が専ら撰任されることになった。

第三節 「院家」の創設と発展

本節では、僧団を構成する寺僧個々が止住して、その生活と修行を維持する場である院家・院房について、その成立と存続の条件、院家とは別個の発展をとげた院房の「院家」化、そして「門跡」の成立について考える。

寺僧集団が止住したのは、大仏殿背後に造建された三面僧坊のほか、寺域内で独自の教學活動の拠点として、独立した寺院の規模をもつ院家と、寺僧が三面僧坊以外の止住の場を求めて創建した小規模な房室としての院房である。創建期に造営された三面僧坊に加えて、平安中期以降、寺内に院家・院房が出現し、いずれも寺僧が寺内止住する場とされていた。これらは寺域内に区画を占めるものであるが、寺域それ自体は僧団に帰属し、その管理は寺務組織にゆだねられると認識されていた。つまり細分化された寺財としての寺域の一面は、寺僧の寺内止住と師資相承が維持される限り、僧団の容認と寺務組織の許可

のもとに、私財としての保有・相承が承認され、ここに院家・院房が成立することになる。このうち院家は、奈良時代に創建された戒壇院や唐禅院や、平安中期に創建された東南院・尊勝院などのように、その成立時から、寺家からの一定の独自性を保っていた。

諸宗兼学の寺内にあって、院家は特定の宗の教學を負う拠点であり、院家を代表する院主は、各宗の法脈の正系に連なり、各宗の教學を門弟に相承させるとともに、その権威によって門徒を統轄した。そして院主は、院主職にともなう堂舎・僧坊・経藏・所領や聖教等を管理し、院司の執務する院家政所に、その経営の実務をゆだねたのである。また院家の存続は、寺家から別相伝を承認された院家領により支えられた。この院家領としては、平安時代には、院家専有の莊園・田畠・家地であったが、院政期から鎌倉前期にかけて、院家領莊園の大半が顛倒し、鎌倉中期以降には、寺家領莊園の領家職の請負いとその多くをしめた。このように寺家から独自性を保つ院家が、自らの存続を寺家の所領に依存するという現象が見られるようになったのである。

さて寺僧が止住する院房も、平安院政期以降に、寺家から独立して存続する院家と同質化を目指し、そのような処遇を寺務組織に求め、また三面僧坊の房室も同様に院家化への道をたどることになる。少なくとも鎌倉後期以降の寺内において、寺僧

が止住する基本的な単位は、三面僧坊・院家・院房という形態を問わず、寺家から独自の経営と継承を許容された「院家」であるとする事ができる。

寺僧の止住単位が、「院家」という形態を一般的にもつことになった、鎌倉後期から南北朝時代にかけての寺内において、皇族・貴族を出自とする貴種の寺僧が止住する東南院は、「門跡」と呼ばれるようになった。元来は法流との語義をもつ「門跡」が、貴種の法流を示す貴種「門跡」として用いられ、さらに貴種が入室する「院家」とその院主自身が、「門跡」と称されるようになったと考えられる。この「門跡」としての東南院が、一般の「院家」と異なるのは、法流における卓越した位置とは別に、「門跡」に付与された永宣旨により、「門跡」が門徒への僧綱官位の補任権を掌握した点にある。なお室町前期には、尊勝院も「門跡」と称されるようになり、法流の正嫡という立場と僧綱官位の補任権により、門徒の配下「院家」に優越した地位を占めることになった。しかし「門跡」の廃絶や、他寺常住の貴種による名目的な「門跡」兼帯により、宗の教学の相承を媒介とする「門跡」と門徒との関係は崩壊し、「院家」による法流分散のなかで、宗の教学の形骸化が進んだのである。

中行事として編成し、会日にしたがって諸法会を開催した責任者である寺務組織（寺家別当）は、寺会への招請権をおとして、寺僧集団を統轄することになる。そして創建期以来、東大寺における経学興隆の任務と、寺僧に修学の場を提供するという機能を負うて、読経・講経・悔過・論議・説戒等の法要形式をもつ寺会が創始されたのである。

さて創建期より今日にいたるまで、継続的に勤修されたといわれる希有な法会が、二月堂修二会である。天平勝宝四年に実忠和尚により、花厳宗僧の悔過法要の習熟のために創始されたと推測される十一面悔過は、結衆としての練行衆により維持され、平安前期には二月朔日より二七カ日の間、二月堂を会場に補陀落観音を主尊とする、寺内諸会の二月堂修二会として勤修されていた。このように当初は上院僧団の自行法会としてあり、上院勢力の凋落後も、花厳宗僧のかかわる数少ない法会として勤修されつづけた二月堂修二会は、平安中期には、花厳宗再興をはかる尊勝院々主光智の注目をうけ、以後は花厳宗長吏のかかわる「不退之行法」として維持されることになる。さらに平安院政期までに練行衆は、和上・大導師・呪師・堂司からなる二月堂四職により統括され、学侶・堂衆という寺内階層を越えて、受戒により行法中は共通の戒体を持ち、集会により独自の決議をおこなう、特異な花厳宗僧の小集団を構成したのである。なお「不退之行法」という認識と、特異な声明・所作への評判

第四節 平安前期東大寺諸法会の勤修と二月堂修二会

本節では、寺院の象徴的な行事として、寺内堂塔を会場に、寺僧集団により次第に従って勤修される法会をとりあげ、法会の成立要素と編成、そして今日まで継続的に催されている二月堂修二会のなかに、寺僧にとつての法会勤修の意味を考える。

東大寺では、長い歴史にわたり、様々な条件のもとで数多くの法会（寺会）が勤修されたが、これらの寺会個々の性格を踏まえて分類を施すためには、法会とはいかなる構成要素により成立するかを考える必要がある。そして法会勤修の前提的な要素として、本願主・興由・目的が、法会の実施上の要素として、招請者・会日・会場・職衆構成・勤修内容・経済的条件・意義が、法会の成立する必須の要件として確認される。これら多様な構成要素の内、諸法会を年中行事として編成する立場にある寺務組織にとつて、最も重視すべき要素は、供料所経営に直接かかわる経済的条件であろう。さて平安前期における寺家の法会編成を示す寛平年中日記には、当時の法会の種類・内容・構成が列記されている。そして寛平年中日記に記載される、寺家から寺僧への供料の下行形態により、寺会は寺内大会と寺内諸会に大別できる。この二様の寺会への格付けは、法会の構成要素に掲げた様々な要件に基づき、寺家にとつての重要性によりなされたと考えられる。また大会・諸会にわたる寺会を、年

は、広く僧俗にわたる聴衆を生むとともに、次第に二月堂修二会の地位を高めることになり、鎌倉後期を境として、花厳修僧に限定されず、学侶・堂衆の寺僧集団が広くかかわる法会として変容することになった。

第五節 寺内僧団の形成と年預五師

本節では、戒律に基づく寺内僧団の存在と、僧団維持の前提条件としての集会制度、この集会における衆議により発給される僧団の発給文書をたどるなかで、僧団の発展過程を明らかにするとともに、僧団の代表者である五師とその運営組織である五師所（年預所）の、具体的な機能と発給文書を検討することにより、年預所の寺家経営への関与と、寺務組織への成長について考える。

戒律を規範として存立する印度初期仏教教団の理念は、わが国の寺院社会において、比丘集団への加入の儀式である受戒、比丘集団の清浄を保つ説戒・懺悔という儀式として受け容れられていた。そこでわが国の寺院社会においても、戒律を尊重し、「和合僧集会」のもとに、羯磨作法を清浄保持と意思統一の手段とする僧団が、たしかに存在していたわけである。公家主導のもとに形づくられたわが国の寺院社会のなかで、僧団がその

明確な姿を現わすのは、時代的に遅れることは当然である。そして東大寺においては、創建を約一世紀下る平安前期に、「五師并宿徳」を中心として、集団としての意思統一の場である集会を催す、自律的な僧団の存在を確認することができる。また平安前期の内に、僧団は公家から承認される存在となり、寺司撰任にあたっては、僧団の推挙が必要な手続きとして定められた。そこで公家の承認のもとで寺司撰任に影響をもつ僧団は、寺内では寺家経営にしだいに発言力を強めるとともに、公家への示威行動、僧団の発給文書、寺領荘園への発向などにより、寺外への強制力を発揮することになった。

僧団が結合する上で不可欠の集会は、平安前期より、寺僧集団の意思を統一する唯一の場として寺内に定着した。そして集会における僧団の利害・権益をめぐる衆議は、寺務組織に大きな影響力をもつことになり、これが寺家経営に僧団が介入する糸口となった。しかし僧団の寺家経営に介入する範囲が広がり、おのずから集会開催の回数が増加するなかで、集会への出仕を義務付けられている寺僧個々の負担も増大することになる。集会が僧団存続に不可欠であるという原則とは裏腹に、集会出仕が寺僧にとり大きな負担となる現実、しだいに集会への寺僧の意識を変質させ、時代を下るにつれて、集会制度の形骸化が進むようになった。なお集会により統一された僧団の意思は、五師起草の文書として寺内外に発給された。本来は寺務組織を

介して、寺外に意思表示をおこなっていた僧団が、平安院政期には独自に「東大寺衆徒解」や「大衆下文」を発給して意思表示を行い、この院政期を境として、寺内外に僧団の意思を表明するための、僧団の運営組織が急速に整備されたのである。

前述のとおり、僧団の形成は集会制度の発足と表裏をなし、集会を開催・運営する寺職としての五師が、平安前期の僧団形成とともに寺内に登場し、僧団の中核に位置したことは言うまでもない。この五師という寺職は、仏教流伝の過程でうまれた「五人」という名数への特有の認識にもとづく、わが国の寺院社会に特有のものと考えられる。そして五師は、平安前期から院政期にいたる間に、僧団代表者、集会の召集・運営、僧団発給文書の効力保証、寺僧帰属物権の権利保証、文書管理という様々な機能をはたした。また平安院政期より、五師の一人が年番の年預五師として年預所を構成し、集会による僧団の意思を実体化する組織として、寺家経営に介入したのである。また僧団は、法人としての寺家の実体であることから「惣寺」と称されたが、この「惣寺」を統括し代表する年預五師の執務する年預所が、その立場に依拠して寺務組織に成長することになるのである。

五師のもつ機能の延長上にあつて、僧団の寺家経営への介入という背景のなかで、鎌倉時代における年預五師とその執務機関である年預所は、「惣寺」代表格・寺内経営・寺領経営の三

分野に大別される機能を果たした。第一の「惣寺」代表格として

は、寺家別当と僧団との接点、寺外と僧団との接点にあつて、相互の意思伝達を図るとともに、公家・武家への訴訟指揮を行う年預五師の機能が知られる。第二の寺内経営としては、五師機能を吸収した、集会の召集・運営、僧団発給文書の起草、寺財管理、法会開催、財務活動、寺僧の統制、寺内機関の統轄にわたる機能が確認される。第三の寺領経営としては、所職の付与・回収、年貢・公事の収納・配分、非法制裁などにわたる、寺領の安定経営を実現するための諸機能が見いだされる。そして第三の寺領経営の実績により、第一・二における年預五師の機能が支えられたといっても過言ではない。

さて年預所は、鎌倉中期以降に、寺家経営に積極的に進出し、従来の寺務組織である寺家別当・三綱に代替する機能をはたす寺務組織へと、急速な成長をとげた。そして寺家を代表する立場の寺家別当と、新たな寺務組織となった年預所との間には、かつての寺家別当と公文所との間と同様に、別当御教書・年預五師書状、仰詞・申詞、僧俗の往来という媒介手段により、寺家経営をめぐる緊密な意思交流がおこなわれ、寺家経営の実務をはたす年預所と、寺家経営にかかわる最高の意思決定をおこなう寺家別当により、機能分掌の体制が成立したわけである。そして南北朝時代以降、年預所は、創建期以来の寺務組織を構成した三綱をも、その指揮下におさめ、名実ともに寺務組織と

して存続することになる。

第二章 中世東大寺の再建活動

平氏による南都焼討から復興をはかる東大寺において、その造営事業になった、「大勸進職」と「勸進所」の具体的な活動を、鎌倉時代を中心にとどるなかで、「大勸進職」の過半をしめた「禅律僧」の基本的な性格、「大勸進職」と僧団との関係(第一節)、「勸進所」の組織的な構成とその発展(第二節)について考察する。

第一節 東大寺大勸進職の機能と性格

本節では、鎌倉時代における東大寺の再建活動を主導した、俊乗房重源を初代とする造東大寺大勸進職の補任形態と機能の変遷、造営事業をめぐる大勸進職と寺僧集団との協調・対立交々の関係、そして「禅律僧」が大勸進職の条件とされた理由について考える。

東大寺の再建にあたり大勸進職が補任されたのは、もはや国家事業としての大寺造営が不可能であるという、律令国家の財政的な理由があげられる。平安院政期以来、貴賤の喜捨をもとめた勸進聖による、造寺・写経・法会興行等の勸進活動が盛ん

となり、事業規模の大規模化したがい、勸進聖を統べる大勸進が登場した。東大寺においては、鎌倉時代初頭より明治維新まで、連綿として造営責任者の寺職として、大勸進職が補任され、特に南北朝時代からは室町後期までは戒壇院長老が、また江戸前期からは龍松院々主が、大勸進職を兼帯し、折々の寺内造営・修理にあたることになった。

鎌倉時代における大勸進職は、造営事業を後援する公家と幕府の意向により補任され、その任務としては、いうまでもなく造営活動の主導とともに、造営財源の柱となる造営料国の経営が主要な柱であった。とりわけ中世を通じて造営料国とされた周防国衛領は、その国司職を兼帯する大勸進職の任務を支える重要な財源であるとともに、大勸進職にともなう得分をも提供した。そこで重源・栄西・行勇の任期中に、大仏殿をはじめとする寺内堂塔の再建が一段落して以後、寺僧や洛中諸寺僧のなかには、周防国司職を兼帯できる大勸進職を競望するものが現われることになる。

大勸進職が公家・幕府の意向により補任されることから、直接の受益者である寺僧集団の意思は、そのまま大勸進職の補任に反映されることはまれで、立場と意識のちがいがから、しばしば両者の間に、造営事業をめぐる対立・相論がおきることにあった。造営料国の得分を私する大勸進職に対して、寺僧集団は公家に訴訟を提起するとともに、望ましい大勸進職の理想像を

かかげて、廉直な僧侶の撰任を求めたのである。そして鎌倉後期に寺僧集団は、「禅律僧」を大勸進職撰任にふさわしい条件として掲げて公家に訴え、これに付加条件が加わった末に、南北朝時代初頭の混乱期のなかで、寺内戒壇院の長老が大勸進職を兼帯するにいたった。

さて大勸進職の撰任条件とされた「禅律僧」とは、おおむね鎌倉中期に、「諸宗通用之法」としての禅学・律学を行業の術として兼修し、持戒・持律により三宝物互用を犯さぬ、戒行清浄・廉直な資質を期待された一群の僧侶集団を指すものである。戒律興行の気運のもとで、通世により世俗の縁からはなれ、寺院社会では空語と化した持戒・持律を旨とし、清浄・廉直をたもつ「禅律僧」こそ、その属性を反映した、清廉な造営事業をすすめることができる時期だったのである。しかし公家・幕府からの崇敬を背景に、「禅」・「律」宗の閉鎖的な教団化が進み、その教勢が伸長するなかで、現実的な「禅律僧」の資質も大きく変化をとげ、私欲を追う「在京黒衣之僧」と呼ばれた「禅律僧」が出現するにおよび、単なる「禅律僧」では、大勸進職の理想像を表現することはできなくなった。そして南北朝初期の政治的な混乱期に、寺外の「禅律僧」ではなく、寺内に止住する律僧の戒壇院長老が、大勸進職に就任するに至ったのも、しごく当然の結末かもしれない。なお鎌倉後期における、世俗勢力の後援をうけた「在京黒衣之僧」に象徴される、悪徳

の「禅律僧」の出現は、「禅律僧」という言葉の語義を、清浄・廉直の僧とは対局にある悪徳の僧へと変化させたのである。

第二節 東大寺勸進所の創設と諸活動

本節では、大勸進職のもとで造営事業を支えた、寺内修造機関である勸進所の成立過程と組織的な構成・機能について考え、さらに勸進所と一体化して造営活動を負う「油倉」について触れる。

東大寺勸進所は、初代大勸進職の俊乗房重源が、勸進聖集団による造営活動の拠点として、寺内鐘樓岡に設けた東大寺別所にて、その起点をもつ。この東大寺別所には、浄土堂を中心とする堂舎のほか、従来は修理目代の支配下におかれていた木津木屋所が付属しており、勸進所の活動は、この別所に集住する勸進聖によりなされたわけである。

勸進所の具体的な活動は、大勸進職の機能を実務的に支えるところから、造営財源の経営と造営・修理事業に大別され、これに造営・修理に付帯の業務、大勸進職と惣寺との接点という役割が加わる。このうち造営財源の経営については、国司職をもつ大勸進職の周防国衛領支配にあたり、在地経営にあたる留守所にたいして、勸進所は大勸進職の政所的な位置を占め、大

勸進職と留守所との間にたち、経営実務を支えたわけである。つぎに造営・修理事業については、大勸進職の活動と重複することは言うまでもないが、特に重源により進められた七堂伽藍の造営は、結集した勸進聖による勸進所の活動の、最も注目された成果であり、さらに榮西・行勇の任中にも、勸進所による新造堂宇が確認されるものの、鎌倉中期以降は、勸進所の組織の変化もあって、見るべき造営活動は激減する。

勸進所の組織は、発足当初、大勸進職重源と同朋の関係を結ぶ勸進聖により構成された。そして平安院政期以来の修造機関である修理所が編成した工人集団を、造営・修理の事業ごとに編成することにより、その実務を漸次吸収していった。しかし重源の没後、彼の勸進聖集団は解体し、以後の勸進所は、規模を縮小しながら、大勸進職の実務機関として存続するものの、勸進所とは別個に、その組織に直接に属することのない勸進聖集団による、活発な勸進活動が見られるようになる。例えば、燈油聖・石壇聖・垣聖・土聖などと呼ばれる勸進聖集団は、各々の分野で勸進活動をすすめていたが、寺家経営の実務に密接な関わりをもつことから、しだいに惣寺から所職として編成されるようになる。そしてこれらの勸進聖のなかで注目されるのが、燈油聖として燈油興行をおこなった西迎房蓮実であった。

西迎房蓮実は、戒壇院の講堂・僧坊等を造営した後、師僧と仰ぐ円照上人を長老に迎えて戒壇院の「院家」としての再興を

果す一方で、燈油興行の勸進活動をすすめていたが、この蓮実による燈油勸進の活動を基礎として、「東大寺油倉」が成立することになる。そして鎌倉中期に、円照上人が大勸進職に就任するに及び、円照上人と蓮実の師資関係もあって、「油倉」に属する燈油聖と、勸進所に属する勸進聖は、円照上人のもとで共通の活動の場を得ることになり、相互に接近するなかで「油倉」が勸進所を吸収することになった。これより室町中期まで、「勸進所油倉」と称した「油倉」が、その活動の主要な柱に造営活動を置くことにより、鎌倉時代初頭に成立した勸進所は、「油倉」組織の中に存続したのである。

第三章 中世東大寺の諸階層と教学活動

平安院政期から鎌倉中期にいたる寺内において、相ついで形成され寺内に地歩を固めた寺内階層について、その成立過程と基本的な性格（第一節）について検討を加えるとともに、鎌倉時代を中心に、寺内階層の中核をなす学侶層の、教学活動・寺内経営・経済活動にわたる広範な足跡（第二・三節）について考察した。

第一節 寺内諸階層の形成

本節では、寺家を構成する寺内階層である、学侶・堂衆・律僧・密衆と俗役について、その成立過程を考える。

創建期より寺内に止住する寺僧は、基本的に仏法を修学する「学問僧」、もしくは「学問僧」を目指す沙弥・童子であると考えられる。もちろん寺内には、「学問僧」とはなりえぬ、従僧や堂僧もたしかに存在したわけであるが、寺僧（太僧）とは「学問僧」であると言ってもさしつかえない。そして平安院政期に、寺内階層として確固とした姿を現わす学侶（学生・学徒・学匠・学道）は、この「学問僧」の延長上に位置し、各々師僧

から継承する「本宗」をもち、「宗」組織または「宗本所」に拠り、「宗」教学を修学する寺僧集団であった。ただし「学問僧」が、寺内階層としての学侶となるには、「学問」によらぬ仏道修行が寺内で容認され、この修行方法による寺僧集団が寺内に定着し、寺内社会における「学問僧」との階層的区別が明確に認識されることが必要な条件となろう。そこで寺内階層としての学侶の定着は、その対局におかれる非学侶、とりわけ後述する堂衆の階層的な定着と表裏をなすものである。

堂衆（禅衆・禅徒・夏衆・律学衆）は、元来、学侶と同様に「本宗」をもち、寺内の諸法会に出仕する寺僧集団であるが、三面僧坊・院家に止住する学侶とは異なり、法華堂・中門堂などの寺内堂宇に止住し、堂宇を守り固有の行法を勤める供奉僧の集団であった。そこで学侶と堂衆とは、法会や「宗」教学へのかかわりもおのずから異なり、これが学侶と堂衆を寺内階層として区分する意識の基底をなしたことは確かであろう。この堂衆が、集団意識のもとで、寺内階層としての位置を固めるにいたった契機は、平安院政期における第一次の戒律復興運動ではなからうか。つまり受戒・律学再興の風潮のなかで、堂衆集団は、受戒会を開催するに不可欠な、戒和尚・大小十師をつとめるにふさわしい行業を積み、それらの職業を独占することになった。そして堂衆の参仕により受戒会が成り立つという認識により、堂衆は単なる堂宇の供奉僧ではなく、寺院社会の維

持にとって不可欠の寺内階層である両堂衆（法華堂衆・中門堂衆）として、その地位を占めたと考える。また「律法之興行」を掲げ受戒会への関わりを深めるなかで、堂衆の「本宗」は、寺内階層としてのよりどころである律宗に一本化されることになった。

平安院政期における第一次の戒律復興運動の所産としての寺内階層が、堂衆であるとするならば、鎌倉中期における第二次の戒律復興運動の生み出した寺内階層は、律僧であった。第一次の戒律復興運動が、解脱上人貞慶等の死去によりいったん頓挫した後、嘉禎年中の叡尊・覚盛等の自誓受戒を契機として、第二次の戒律復興運動がおきた。この運動の高まりのなかで、円照上人等による講律・受戒の活動に賛同する、勸進活動を行業とした勸進聖を含む通世僧集団が、戒壇院を始め寺内律院に集住し、寺僧集団とは異質の通世僧集団である律僧を構成したわけである。堂衆と律僧は、ともに律宗を修学するとしながらも、堂衆の修学する律宗は南山宗と相部宗を合わせたもの、律僧の修学する律宗は南山宗であり、教学的にも両者の律宗は異なっていた。また戒壇院を中心として、寺内律院に止住する律僧は、学侶・堂衆とは異なり、寺内法会には一切参仕せず、堂衆の出仕する受戒会にもかかわらず、独自の法儀を勤めるかわら、世俗と交わる経済活動を行業として、寺家経営に重要な役割をはたす寺内階層として存続したのである。

頭が占めて、神人・公人を統括した。また公人のなかから任じられた堂童子は、かつては政所の構成員であった小綱とともに、寺内諸法会の開催から、寺領荘園の経営にわたる幅広い業務をになつたのである。

第二節 東大寺学侶層の寺内諸活動

本節では、寺内階層のなかで中核的な位置をしめ、寺家経営を支えた学侶層について、学侶として寺内に止住する要件、学侶が出仕する法会と僧階との関係、学侶層の活動の実態について考える。

寺僧が入寺して学侶としての処遇を得るためには、以下の条件が必須とされる。第一に、学侶である寺僧を「本師」として得度し、「寺帳」・「名帳」にその名を記載されることにより「寺僧職」を得て、ここに寺僧として認定される。ただしこの条件は、寺僧に共通のものである。第二に、師僧より「本宗」を継承し、「本宗」を中心に諸宗を修学する場が確保されることにより、「学侶之名字」を称することが許され、ここに学侶として認定される。第三に、修学した「本宗」に基づき、法会の供衆として編成されることにより、学功を積み供料の下行にあずかる「供僧職」をえる。このように、「寺僧職」・「学侶

空海のもたらした真言密教（純密）は、奈良時代に受容された雑密の延長上に、仏性覚悟の術として、広く南都寺院社会で修学された。しかし真言密教は、諸宗兼学の一つとして修学されたにすぎず、真言密教のみを修める唯密僧の姿は、平安時代の寺内には見いだしがたい。ところが鎌倉前期に東大寺別当を兼ねる醍醐寺勝賢のもとで、大仏殿を会場とする顕密供が創始され、真言宗僧のかかわる法会が寺内に生まれた。そして鎌倉中期に醍醐寺において伝法灌頂をうけた寺僧の中道上人聖守により、空海創建の寺内真言院と新禅院が再興されるにおよび、これら密教道場に唯密衆（密衆）が止住して密教法儀を開催し、密教法脈を維持することになった。真言院々主・新禅院々主が、成業に准じた阿闍梨として密衆を統括し、寺内密教法会を維持したわけであるが、寺内における密衆の位置は、学侶・堂衆に比して低いものであった。

さて以上の寺僧集団とは別に、日常的な寺家経営の様々な業務のため、寺家には、木工・鍛冶などの技術者集団、田楽法師・楽人・舞人などの芸能者集団、そして上下司職掌・堂童子・公人・小綱・神人などの俗役、これらの俗人集団が所属していた。そして創建期以来の由緒をもつ俗役は、寺家へ緊密に従属し、日常的に政所（公文所）と造寺所（修理所）に従属して寺役を勤仕する、俗人もしくは半俗半僧の集団であった。鎌倉時代には、これら俗役のうち、上司職掌は八幡宮神主、下司職掌は楽

之名字」・「供僧職」という資格を獲得することにより、学侶としての立場が保証されたわけで、これらの資格の上になつて、学侶の諸活動は実現したと考えられる。

年中行事として勤修される寺内法会に、学侶は中心的役割を果たしたが、各法会に学侶すべてが出仕するわけではない。学侶の僧階や法臘により、出仕できる法会の階層が定められており、学侶はその僧階や法臘があがるにつれて、下位から上位の法会に招請されることになる。そこで学侶は、法臘を重ねながら、「本宗」修学の過程に適宜配置される諸法会に出仕し、学功を積み僧階を進めることにより、より上位の法会に出仕することができた。このように法会には、寺家の興隆を象徴する行事であるとともに、出仕する学侶にとっては、僧階昇進の術であったわけである。そして寺内法会のみならず、凡僧から僧綱への昇進条件とされた興福寺維摩会も、同様の存在理由をもっていた。ただし東大寺の学侶がすべて維摩会に出仕できるわけではなく、貴種と碩学の平僧を除く学侶の多くは、維摩会出仕の機会も得られぬままに、寺家・院家に付与された永宣旨により、寺内限りでの僧綱官位を得たのである。

さて鎌倉中期を境として、寺家経営に積極的な進出をみせた寺内僧団の中核は、言うまでもなく学侶層であった。つまり寺僧集団のなかで、機能的にも員数的にも優位を占める学侶層は、寺家経営のための所職の多くを独占するとともに、また僧団の

意思統一の場である集会を、自らの意思にしたがって導くことになった。この寺家経営をめぐる学侶層の実績にささえられて、僧団を代表する年預所が、従来の別当・三綱の手から、寺家経営の主導権を把握したわけである。また学侶層を構成する学侶個々については、教学活動を踏まえた寺内諸法会への出仕により、寺家の興隆を維持するとともに、下行される供料や寺僧領以下の私財により、私領を獲得し利銭・出挙を行うなど、積極的な経済活動に進出して、借錢という形で、寺家の財政を支えることになった。そこで学侶層は、運営・教学・経済の各側面から寺家経営をささえた、寺家存続の中核的な階層とすることができよう。

第三節 東大寺講衆集団の存立基盤

本節では、世親講衆という一寺内集団のなかに、教学・経済両面にわたる学侶層の活動をとらえ、世親講の具体的な内容と、講衆が存続した意味について考える。

建久年中、三論・花嚴両宗の若膺学侶は、低迷した仏法修行の興隆を図るとの意図のもとに、世親講を創始した。この世親講とは、先達十人を含む四十人の講衆により、法華經と俱舍論からの配文めぐる、講讃論議と堅義論議が勤修される論議会で

あった。そして講会を指導する先達講衆には、維摩会の堅者・講師に出仕した実績をもつ寺僧が撰任される定めであり、世親講には、維摩会出仕に備えるための学功を積む場との、至って具体的な目的があったことが知られる。また講衆のなかから世親講年預がえらばれ、承仕を配下において講会の運営にあたるとともに、寺家側からは、執行の関わりにより、寺領荘園の負担として饗膳・捧物が寄せられた。

元来は教学活動のために結集した世親講衆であるが、鎌倉中期にいたり、講衆による積極的な経済活動が見られることになる。これは世親講田の集積・経営と、講田経営を基礎とする出挙・利銭活動であり、寺内の講衆集団がかかわる経済活動としては、きわめて注目されるところである。このうち恒常的な田地集積がおこなわれた世親講田は、大和・山城・伊賀国に分散し、おおむね寺領荘園内で獲得した地主職を主体とし、また寺領荘園の経営組織に依拠して、講米の確保がなされることが多く、講田経営は寺家の後援により維持されたといえる。また出挙・利銭は、寺僧もしくは寺内機関を対象として、かなり広範に行われたものであるが、あくまで寺内という枠のなかでの金融活動であったわけである。しかし講衆の経済活動は、その規模から考えて、講会の開催を維持するためのものではなく、むしろ講衆の寺内止住をささえるという目的があった。

世親講衆は、合議にもとづき独自に講衆を補入するという、

自律的な集団性を維持していたが、その基本的な性格は、さしたる出自をもたぬ平僧集団ということである。寺僧集団を貴種と平僧にわけるという出自という要素は、寺内では処遇にかかわる重大な意味をもっていた。それは貴種と平僧で、学侶昇進の条件とされる諸法会への招請に大きな相違があり、貴種は若膺で高位の法会に出仕し速やかな昇進をはたし、平僧は高臈にいたっても下位の法会に止まるという傾向がみられる。この現実のもとでは、昇進と供料下行という側面で、貴種と平僧とは大きく差別され、必然的に平僧が学功と供料を安定して獲得できる場が必要となる。そしてここに世親講が存続する意味があったのではなからうか。つまり教学復興の風潮のなかで、寺内平僧により創始された世親講を勤修する講衆集団は、この講会の存続により、学功と供料が保証される場とともに、講会遂行を掲げた講田経営と出挙・利銭活動による、寺内止住を支える資縁と、また平僧集団としての秩序保持と処遇改善を寺家に要求できる集団性を、得ることができたのである。

第四章 東大寺油倉の成立とその経済諸活動

「東大寺油倉」は、戒壇院配下に位置する律宗系の寺内院家でありながら、多彩な経済活動により、中世東大寺の存続を経済的な側面から支えた、きわめて特異な寺内組織である。この「油倉」の成立過程（第一節）と、鎌倉中期から室町中期にいたる寺内外での「油倉」の諸活動（第二節）をたどるとともに、特に室町前・中期における「油倉」の金融活動と惣寺財政との関係（第三節）について考察する。なお南北朝時代から室町前期にかけて、「油倉」の燈油興行機能を代替した「楞伽院」について、その機能と院家としての存続の条件についても検討した（付論）。

なお史料上に現われる「油倉」には、第一に、燈油貯蔵のための倉庫群としての「油倉」、第二に、戒壇院配下の院家としての「油倉」、第三に、燈油興行や造営修理を任務とする寺内機関としての「油倉」がある。そして本章では、第三の「油倉」を中心に考察を進めるが、その組織的な発展を支えた機能を検討する上で、第一・第二の語義の「油倉」に触れることになる。

第一節 燈油聖の活動と油倉の成立

本節では、鎌倉中期以降に燈油興行になった燈油聖の活動をたどり、そのなかで成立した油倉の発展過程を考える。

燈油聖とは、本来は燈油興行に従事する勸進聖集団をさしたと思われるが、鎌倉中期以降の史料上に現われる「燈油聖」は、燈油勸進活動を行う聖集団の代表者として、「燈油沙汰」職をもつ勸進聖の呼称であった。そしてこの意味での初代の燈油聖は、先にも触れた西迎房蓮実であり、その燈油勸進活動により油倉の基礎がたまるとともに、蓮実が師僧と仰ぐ戒壇院中興開山円照上人との関係から、油倉と戒壇院との密接な関係が生まれることになる。そして蓮実の没後、その地位を継いだ善教・信聖の活動のなかで、寺内水門に執務所をもつ油倉の、組織的な基礎が確立した。蓮実以来の燈油聖は、燈油興行の財源として、勸進活動を継続するとともに、喜捨をうけた勸進銭等により、燈油田の集積を積極的に進めた。また大和・山城・伊賀各国に散在する燈油田について、燈油聖はその一筆ごとの田積・年貢・作人等を把握し、きめこまかい経営を実施したのである。

このような燈油聖による燈油興行の実績により、従来は御油目代の支配下にあった平安院政期以来の御油荘の経営も、燈油聖にゆだねられ、寺内で消費される燈油は、燈油聖により一手

に確保されることになった。そこで鎌倉後期には、寺内の造営修理事業を吸収した油倉は、寺家経営の上で不可欠の存在となり、鎌倉後期における燈油聖信聖の辞任にあたっては、戒壇院長老のみならず年預五師も慰留を試みたほどであった。

信聖以後の歴代燈油聖も、同じく燈油田の集積し、また燈油田・御油荘の権益を守るための在地経営や訴訟活動に尽力するとともに、その諸活動を基礎に、寺領莊園からの年貢収納など新たな活動を手がけるなかで、油倉の規模を拡張させていった。そして油倉のもつ経済能力は、単に寺内にとどまらず、大和国の燈油流通をおさえる、興福寺大乘院配下の符坂油座からも、一目をおかれるに至ったのである。

しかし南北朝時代にはいると、油倉の経済活動の範囲は拡大の一途をたどり、その一方で御油荘の経営が困難となるなかで、油倉は組織発足の業務である燈油興行を、配下院家である楞伽院にゆだね、また燈油聖も油倉から消え去る。そして室町前期に楞伽院が廃絶した後、燈油興行の業務は戒壇院定燈方に移り、以後、油倉がその業務にかかわることはなかった。

第二節 油倉の組織と諸活動

本節では、鎌倉中期から室町中期にいたる、油倉の組織構成

と、多様な展開をみせた活動の実態について考える。

油倉は、水門の坊地内に、屋敷・土蔵のほか持仏堂・僧堂をそなえ、持仏堂には「油倉本尊」を安置し、固有の地蔵講・修正会を勤修する、寺内の一院家であり、単なる実務機関の執務所とは異なる。また油倉は、燈油興行をはじめとする活動の拠点とされたわけであるが、教学的にも組織的にも、戒壇院配下の院家として存続し、後世には律院と称されたのである。

燈油聖を中核として発足した油倉には、鎌倉中期に勸進所が吸収された後、造営にかかわる大行事（正勾当）・油倉沙汰人が加わり、そのもとで油倉下部が実務を負った。ところが、燈油興行と燈油聖が楞伽院に移った南北朝時代には、勸進所側の大行事、旧来の油倉側の坊主・知事・行事僧などの役僧、中間・下部という構成に変化し、以後は定着して室町中期まで続くことになる。そしてこれらの油倉構成員が、組織的に確立する鎌倉中期から、組織が廃絶する室町中期まで、寺内外にわたる広範な油倉の諸活動をささえたのであった。

さて油倉の諸活動とは、第一に燈油興行、第二に造営修理、第三に貯蔵・保管、第四に財源経営、第五に寺内流通、第六に寺内金融という分野に確認することができる。そしてこれら諸活動の内、第一・二は始原的な業務、第三・四は派生的な業務、第五・六は発展的な業務とすることができる。

時代的に油倉による諸活動の展開をみるならば、鎌倉中期か

ら後期までの活動は、当初からの燈油興行にかかわる燈油田経営・燈油確保の業務と、勸進所を吸収したことによる造営修理を主要な柱として、勸進所に委ねられた上司倉（印藏）の管理の継承、年預所から委託された年貢米・造営資財の収納・貯蔵という範囲にあった。ところが南北朝時代にはいると、油倉の活動から燈油興行が離れる代わりに、従来の造営修理に加えて、蓄積された経営能力と米銭を基盤として、寺外の流通経路との接触による、多彩な油倉の経済活動が見られるようになる。とりわけ南北朝時代から室町前期にかけての、周防国衛領・丹波国後川荘・播磨国大部荘・遠江国蒲御厨などの寺領莊園や兵庫関の経営に、造営料所としての施入や年貢収納活動を糸口として、深い関わりを持ったのである。大勸進職のもとで勸進所の機能を負う油倉が、造営料所の経営に進出するのは、自然の成り行きであろう。また周防国衛領の経営への油倉としての関わりは、年貢の収納と寺内下行という範囲にとどまるものの、これとは別に、油倉の役僧が周防目代や、周防国司職を兼帯した大勸進職に就任するという形で、人的なかわりがあったことは注目される。

これら寺外財源の経営で、油倉が果た役割の範囲は、単なる収納機能のみから、領家職や代官職の請負まで個々別々である。しかしいずれにしても、収納・貯蔵機能を前提として財源経営に関与することにより、油倉は、寺内貸米・物資供給・年貢銭

下行という寺内流通の業務へ、さらには寺内金融へと活動範囲を拡大することが可能となったわけである。そこで油倉は、財源経営にかかわりをもつことにより、広範な経済活動の可能性を得たという考え方ができよう。

第三節 油倉の金融機能と惣寺財政

本節では、寺内で盛行していた利銭・出挙を、油倉が積極的に採り入れ、自らの多彩な経済活動とともに惣寺財政をさえたという具体的な構造について考える。

寺院社会における、寺僧相互もしくは寺僧から俗人への利銭や出挙は、既に平安後期から見いだされる経済活動である。そして東大寺に伝来する数多くの借請状から、さかんな寺内・寺辺への出挙・利銭活動の存在が確認される。ところが鎌倉後期以降、寺僧もしくは寺内機関から、惣寺への利銭貸付けがさかになり、惣寺利銭借請状という特別な形式の文書が、年預所・五師所から発給されるようになった。前述のとおり、学侶層は積極的に経済活動にかかわりを持ち、その成果として、経済能力と田畠・米銭を蓄積した。一方、寺務組織に成長し寺家経営の中心に位置した年預所は、法会勤修を軸とする寺内運営を進めるために、学侶層の参画をえて、寺領莊園の経営を行った。

しかし鎌倉後期から南北朝時代にかけての社会的な混乱は、寺領莊園の経営と、定期的な年貢・公事の徴収を困難にし、財政的な基盤が動揺するなかで、年預所による寺内運営は大きな危機をむかえた。ここで年預所は、寺家経営を維持するための一時的な財源を、寺内学侶層のもとに蓄積された銭貨に求めるという、いわば「借」の財務活動を実行したのである。学侶層をはじめ寺内機関を銭主として、寺領莊園等の年貢・公事を質物においた惣寺利銭借請状は、このような惣寺財政の危機を打開するための措置であった。

ところで南北朝末期に、大勸進職が袖判を加えた油倉利銭借請状が登場し、室町前期から中期にかけて、油倉による利銭借請が急速にさかになった。油倉が寺内に利銭をもとめて銭貨を集積するという、「借」の財務活動を行わねばならなかったのは、いうまでもなく油倉が、造営修理活動を維持し、さらに惣寺から寺外財源の経営を委ねられ、年貢・公事の収納・貯蔵から寺内下行にいたる業務を果たしていたからに他ならない。つまり鎌倉後期より、年預所が惣寺利銭借請状を発給し、一時的財源を利銭にもとめて寺家経営を維持するという業務を、室町前・中期には、年預所から委託された油倉が受け継いでいたわけである。そして油倉による利銭借請の盛行は、そのまま寺家経営と院家経営において、油倉が果たした役割の大きさを示唆することになる。

すなわち油倉は、おもに寺内院家から利銭を集め、一旦は蓄

銭分に組み入れた上で、あらためて造営修理や寺外財源経営から寺内下行にいたる業務に支出するとともに、その一部を、利子を加えた旧借錢の返済に充てた。もちろん利銭のみで油倉の活動が維持されたわけではなく、利銭により確保された運営経費により寺外財源の経営が支えられ、寺外財源から収納される年貢・公事により、利銭が継続的に返済され、ひいては油倉の広範な活動が実現したわけである。一方、油倉に利銭を提供する寺内院家側では、その固有の経済活動により蓄積された銭貨を、一定期間にわたり油倉に貸与することにより、借錢の返済時に、不労所得としての利子分が獲得できる。銭貨の集積を必要とする油倉と、銭貨の運用の場を必要とする院家の、双方の利害の接点に、油倉利銭借請状が成立したわけである。そして油倉の活動が安定して維持され、その信用が保たれる限り、院家にとって油倉への借錢は、もともと有利な蓄銭運用の方法とすることができる。なお油倉への借錢の利子は、その本源が財源経営による余剰財にあることは言うまでもない。

さて寺家財政は、教学活動維持・寺内堂塔維持・寺僧止住維持・寺務組織維持という財務の柱から構成され、このうち寺内堂塔維持の財務は勸進所により管掌され、寺僧止住維持の財務は、学侶層の経済活動を背景として、寺内院家に移行することにより、残る教学活動・寺務組織維持の財務が、実質的に年預

所により総括される惣寺財政ということになる。そして油倉は、勸進所としての寺内堂塔維持財務の管掌、利銭を媒介とする寺僧止住維持財務への関わり、そして年預所からの委託による教学活動・寺務組織維持の財務の実務を担当することにより、寺家財政の全分野に関わりをもつことになった。そこで油倉は、寺内一院家にすぎぬものの、その果たした機能から見れば、年預所のもとで惣寺財政を支えるのみならず、寺家財政を支える希有の実務機関であると言えることができる。

財源経営と寺内借錢の財政的な均衡の上に存続する油倉の経済活動は、また院家としての油倉それ自体を維持する条件でもあった。しかしこの均衡が崩れることは、油倉の借錢集積を続けるための信用の喪失につながる。そして応仁・文明年中にわたる内乱と社会的混乱は、油倉が関与する寺外財源の経営を著しく困難にした。寺外財源からの年貢・公事により維持されていた油倉の財務活動は、その存続が困難な状態に追い込まれたと想像される。寺外財源の崩壊と、寺内における信用の喪失が、「借」の財務構造の基盤を否定し、油倉の実務機関と院家としての存続を不可能にした。廃絶の直接的契機は明らかではないが、これらの内的・外的な要因によって、文明年中に油倉は寺内から消滅したのである。

本節では、南北朝時代に油倉から燈油興行の業務を委譲された楞伽院について、その活動と財務構造を検討することにより、院家としての存続の条件について考える。

国分門東脇の水門に院地を占める楞伽院は、平安院政期に史料上に登場し、室町前期の応永末年に廃絶した寺内院家である。なお楞伽院の坊地は、院政期から細分化が進み、俗人が買得・相伝により居住し、その周辺は寺辺七郷の水門郷に成長することになるが、中世の楞伽院の院地は、その一帯の一画を占めるに過ぎなかった。

楞伽院の特異な発展は、鎌倉後期に油倉との密接な関係を取り結んだことに起因する。つまり鎌倉後期の正応・永仁年中までに、油倉は水門に移住し、楞伽院の院地・坊舎を吸収して執務所とし、その院家としての規模を拡張するかたわら、楞伽院の院主職・住僧と固有の法儀の存続を認めた。住持・坊主・斎戒・中間・下部等から構成される楞伽院は、油倉から吸収された後も、院家として一定の独立性を保ちながら、油倉と戒壇院に従属し、律院として存続するとともに、両者からの教法的・経済的な保護を受けたのである。

そして油倉から楞伽院にあたえられた経済的保護とは、油倉の活動範囲の急速な拡大にともない、燈油興行の業務を委譲さ

なうことになったのである。

さて燈油興行にともなう燈油料所の経営は、楞伽院の院家としての存続に、いかなる意味を持ったのであろうか。楞伽院の算用状を検討するならば、いかに経営困難とはいえ、燈油料所からの歳入は、寺内の燈油を確保して余りあるものがあり、歳出は燈油確保と院家維持の経費を含み得るものであった。すなわち鎌倉時代より徐々に寺家財政を支えた財源が減少する傾向のなかで、惣寺財政は縮小の一途をたどったが、燈油納所・間職というような特定の寺役を負う院家にとって、その寺役遂行のための財源は、院家を維持するに充分な規模をもっていたわけである。そして寺家経営を維持する多様な業務が、個々に料所をともなう所職化され、その個々の所職を寺内院家が保有することにより、規模は縮小しながらも寺家経営は維持され、また減少しながらも一定数の院家が存続することになるわけで、財源が激減する寺家にとって、寺役を負担し自らも存続する院家は、財政的な破綻を回避するための緩衝効果を果たしたことに注目しておきたい。

れ、その財源の経営を委ねられたことである。すなわち鎌倉中期以来の燈油聖がもつ燈油沙汰職業務は、南北朝時代初頭までに、燈油田の経営と年貢収納を機能とする燈油納所職と、燈油確保と寺内下行を機能とする燈油間職に分化した。そして当初は、油倉に属した燈油聖が燈油納所職を、楞伽院が燈油間職を保有して、両者の協力のもとで燈油興行が進められたが、油倉最後の燈油聖性恵の没後、楞伽院は燈油聖と燈油納所職を吸収し、燈油興行にかかわるすべての業務を、楞伽院が掌握することになった。ここに楞伽院は、寺内の堂塔への燈油下行を条件に、燈油興行を業務とする寺内機関として、惣寺から承認されるときにも、燈油料所の経営と、燈油料物として寄進される物権を付与された。そして楞伽院は、燈油興行の業務と院家を維持するための貴重な財源を獲得したことになる。

楞伽院に付与された燈油料所とは、平安院政期以来の御油莊の由緒をもつ東喜殿莊と、散在燈油料田畠である。しかし東喜殿莊の年貢は、すでに南北朝時代の初頭より、在地下司小山氏による横領未進が続き、楞伽院による在地経営とは、実のところ下司との交渉の結果としての、下司への年貢徴収委託という範囲にとどまるものであった。また散在燈油料田畠の経営は、地主職に抛り作人層を掌握するという、旧来の燈油聖による料田経営の方法を踏襲したもので、守護や興福寺の容認のもとで経営された零細な散在燈油料田畠の年貢が、寺内の燈油をまか

結

冒頭で述べた基本的な視点・視覚のもとに、中世東大寺の経営史を、寺務組織の変遷、僧団の形成と発展、東大寺の再建と新たな造営組織、寺内階層の成立と寺内における機能、中世東大寺を支えた寺内機関等に焦点をあてながら跡付けてみた。僧団との密接な関係を持ちながら変容を遂げた寺務組織の骨格を措定し、中世東大寺の経営構造と、寺院社会の具体的なありさまについて考察したもので、今後、中世から近世に至る、年預所に主導された寺家経営の実態をはじめ、寺院社会の多彩な実像を追う上での、基礎的な作業を試みたわけである。なお時代史において東大寺の果たした歴史的な役割や、教団活動の遂行と寺内生活史など、全く考察の外におかれた課題はあまりにも数多いが、今後の課題とすることにした。